学問の図像とかたち・220 イラストから読む教科書 犬は黙って不言実行 寺田寅彦
アンケート 東大教師が新入生にすすめる本 1
おじい・おばあに「見える」自然 盛口 満 24
[たまには物理カンターピレ♪]54 アナ・シリングの小筐 太田浩一 30
[法の森から—〈A Letter from the Forest of Law〉]17 アメリカがフィリピンで学んだこと 長谷部恭男 36
[言語学パーリ・トゥード]5 違う、そうじゃない 川添 愛 42

4
Number 558, April 2019
東京大学出版会

[移民の街・ニューヨークの再編と居住をめぐる闘い]7 ウイリアムズバーグと明暗を分けた二つのコミュニティ(1) プエルトリコ系移民組織の自助住宅修繕支援 森 千香子 49
[書評]158 一族の物語 中島隆博 54
[日本美術史不案内]119 Noblesse oblige 佐藤康宏 60
すゞしろ日記 第169回 山口 晃 62
学術出版 63 執筆者紹介 64

UP 第四八巻第四号 (通巻五五八号) 二〇一九年四月五日発行 (毎月五日発行) 定価 (本体価格一〇〇円+税) (一年分一〇〇〇円送料・税共)

ーマです。本小説では、幼少時にナチス支配下のドイツからイギリスへ送られ、イギリス人として育てられた主人公が、消された記憶を青年になってから取り戻し、過去に遡行します。帰属すべき故郷を喪失したまま放浪する主人公は、解決も救済もない宙吊り状態の歴史空間を移動する旅人です。日本語訳でも幻想的な語りを味わえます。

❷『都市空間のなかの文学』前田愛（ちくま学芸文庫、一九九二）

文学には無数の読み方があり、多様な解釈が許容されます。都市空間という視点から、明治から昭和にいたる文学作品を読み解いてみせたのがこの本です。小説テクストの解釈方法の一つを確認すると同時に、文学とは何かについても考えさせてくれます。

❸『柳宗悦とウィリアム・ブレイク――環流する「肯定の思想」』佐藤光（二〇一五）

民藝運動を牽引した柳宗悦は、イギリス・ロマン派詩人ウィリアム・ブレイクを日本に紹介した知識人でもあります。本書は、イギリスおよび日本におけるブレイク受容を精査しています。ブレイクとインド哲学との関係を論じた第四部が、新しい知見を満載して圧巻です。学部生には少しレヴェルが高いですが、ロマン主義の意義と明治・大正・昭和の思潮を教えてくれます。

❹『冒険するロマン主義――コウルリッジと人文学の可能性』大石和欣編（東京大学出版会、近刊）

イギリス・ロマン派詩人・思想家だったサミュエル・テイラー・コウルリッジの著作を、「人文知」というキーワードを軸にして読み解きます。詩人でありながら、同時代の社会や政治を批評し続け、ドイツの哲学をイギリスに輸入し、同時に宗教的著作も著したコウルリッジは、同時代において影響力のある知識人でした。彼の言葉や思考とともに、現代における人文学が探求する知について考えます。

小野塚知二（おのづかともじ）（経済学研究科・経済学部教授／現代ヨーロッパ社会経済史）

❶『Red』島本理生（中公文庫、二〇一七）

ジョン・リードを描いた映画「Red s」ではなくて（これもおもしろい）、島本理生の恋愛小説。現在の日本における人間関係の窮屈さの根源の一つを、小説という仕方で語った卓抜な作品。この半世紀ないし一世紀ほどの間、恋愛・性・生殖・結婚に関してさまざまな不自由と無理を積み重ねてきた結果が、日本の非婚・晩婚傾向や出生率の極端な低下であるとするなら、それは本来、学問が解明しなければならない問題だが、残念ながら、いまもなお、恋愛や性を正面から論ずることを学問は苦手としている。その弱点を巧みに突いたのがこの小説で、むろん賛否や好悪はあると思うが、多くの人に読んでほしい。

❷『社会科学の方法――ヴェーバーとマルクス』大塚久雄（岩波新書、一九六六）

『マックス・ヴェーバー入門』山之内靖（岩波新書、一九九七）

人文社会科学の若手研究者の参照基軸がT・アドルノから始まるような状況になって久しいが、それ以前の古典を知らずにアドルノ、ドゥルーズやガタリばかりでものを考えていたら、「いま」すら理解できな

い。アドルノらの射程では解けない問題があちこちに露呈してきたからで、そうなると古典の出番である。ホッブズ、スミス、マルクスなど大切な古典はたくさんあるが、アドルノの前の大きな山はやはりヴェーバーである。ただし、ヴェーバーの著作は膨大で、必ずしも体系的ではないし、和訳も決して読みやすくない。訳本の理解に苦しんで、原典に当たったら一発でわかったというようなこともある。その難物ヴェーバーを理解するうえで、この二冊はまことに役に立つ。しかも、大塚と山之内ではヴェーバーの真意の理解に大きな差異、ほとんど正反対といってもいい違いがある。西洋近代がもたらしたのは、人間の主体性の満面開花なのか、それとも非人格的で形式的な規律の内面化（「鉄の檻」）なのかという違いである。そうしたずれを感じながら、ヴェーバーに迫り、さらに、それを通じて、人文社会科学の山脈を渉猟することを奨めたい。

❸『経済的自由主義――資本主義と自由』岡田与好（一九八七）

『ヨーロッパの政治――歴史政治学試論』篠原一（一九八六）

前者は多くの憲法学者に刺激を与えてきた「営業の自由」論争の産物であると同時に、わたしの経済史研究の方向性を決定付けた書物でもある。後者は、三十年ほど前に現代（廿二〇世紀）西洋経済史の講義案を用意する際に、また、十年前に自らその分野の研究に乗り出した際に、最もお世話になった本。

❹『経済史――いまを知り、未来を生きるために』（有斐閣、二〇一八）、『大塚久雄から資本主義と共同体を考える――コモンウィール・結社・ネーション』梅津順一氏との共編著（日本経済評論社、二〇一八）

前者は経済史の概説書で、産業革命以降（近現代）の推移を通じてだけでなく、前近代や近世との比較からも、いまを知る手引きとなるはず。後者は大塚没後二〇年記念のシンポジウムの成果を元にした本で、わたしは「アソシエーション（協同性）」という長い夢が、なぜ裏切られ続けてきた

啓蒙とはなにか
忘却された〈光〉の哲学
ジョン・ロバートソン 「啓蒙」はいかに生まれ、広がり、そして批判されてきたか？ 世界的権威が明らかにする。
野原慎司、林直樹訳 ◎2600円

鉄のカーテン
東欧の壊滅 1944-56（上・下）
アン・アプルボーム 「冷戦終結30年」、20世紀の全体主義を詳述。山崎博康訳 ◎各4000円

東欧からのドイツ人の「追放」
二〇世紀の住民移動の歴史のなかで
川喜田敦子
同質性だけを頼りとしない統合と連帯の形。 ◎4300円

移民とともに
計測・討論・行動するための人口統計学
フランソワ・エラン ファクトフルネスとしての「共生」を考える。林昌宏訳 ◎4000円

貿易戦争の政治経済学
資本主義を再構築する
ダニ・ロドリック ポピュリズム的ナショナリズムと高度産業社会に充満する不安を理解するための必読書。岩本正明訳 ◎2400円

翻訳 訳すことのストラテジー
マシュー・レイノルズ
「翻訳」という事象の広がりへ。
秋草俊一郎訳 ◎2300円

金子兜太戦後俳句日記
（第一巻 一九五七年～一九七六年）
赤裸々に描かれる句作の舞台裏。戦後俳壇の第一人者による日記、刊行開始。（全三巻） ◎9000円

白水社
東京都千代田区神田小川町3-24
TEL 03-3291-7811 ◎価格税別
www.hakusuisha.co.jp

のかという問いを提示した。

加藤晋（社会科学研究所准教授／厚生経済学）

❶『孤独な散歩者の夢想』ルソー／今野一雄訳（岩波文庫、一九六〇）

ルソーは『社会契約論』や『エミール』がとても有名ですが、これは彼の最晩年の随想文です。地球上で孤独になったという彼の悲痛なつぶやきから始まるこの作品をときどき就寝前に読みます。普段研究するときの社会科学的あるいは経済学的思考方法から少し離れて、ルソーの文章自体を気軽に楽しんでいます。とても魅力的な文章で、私はフランス語を読むことができないのですが、これを読むたびにフランス語を読めるようになりたいと感じます。

❷『集合的選択と社会的厚生』アマルティア・セン／志田基与師監訳（勁草書房、二〇〇〇）

この本はアマルティア・センが一九七〇年に書いた厚生経済学における記念碑的著作です。大学院生のころ、毎年、特定の期間を設けてこの本を読んでいました。各章が二つの部分からできていて、前半が数式の一切含まれていない哲学的考察、後半が数学的表現を用いた形式的分析となっています。前半と後半の両方がきわめてコンパクトで美しい内容となっていますが、古典となったいまでも参考になります。現在は英語の改訂版がでていますが、英語の第一版は私が大学院生のころには絶版となっていました。幸運なことに、日本ではこの邦訳がその時期も入手可能で、他の国の若手の研究者に羨ましがられたことを憶えています。

❸『現代の経済理論』岩井克人・伊藤元重編（一九九四）

東大経済学部の根岸隆先生が退官されるときに発案された論文集で、最先端の成果を紹介することが意図されています。経済学よりも政治哲学に関心を持ちながら経済学の大学院に入学してしまい、戸惑っていたときに友人に勧められてこの本を読みました。その時にはすでに公刊から十年近くが経っていたので、出版当時は最新の理論だったものもそうではなくなっていたわけですが、教科書を読み飽きていた私は圧倒された気持ちになりました。読み終わった後に経済学をやらなければいけないんだ、という強い思いを持ったことは、私にとって大きな価値となりました。

❹『社会科学における善と正義――ロールズ『正義論』を超えて』宇野重規・大瀧雅之・加藤晋編（東京大学出版会、二〇一五）

これは私が携わった本ですが、政治哲学と経済学の研究者たちが、功利主義と正義の対立を論じる八つの章から構成されています。ブックガイドもついており、編集するなかで私自身もとても勉強になりました。この本のプロジェクトを通じて、さまざまな人たちと知り合ったことはいまでも大切な財産となっています。また、私が発案したものではないのですが、この本の装丁がとても気に入っています。プリズムが重なり合うようになっており、さまざまな分野の研究者が織りなす全体を表現していると聞きました。

加納靖之（地震研究所・地震火山史料連携研究機構准教授／地震学）

❶『学研まんがひみつシリーズ　できるで